特集 社会と歴史の空白を埋める

研究者として著者のやり方で人種主義に対抗する戦いの書

人種カテゴリーが、人間が創り出した社会的構築物に過ぎないことを様々な角度から示す

廣部 泉

竹沢泰子 著
▶アメリカの人種主義
カテゴリー／アイデンティティの形成と転換
2・28刊 A5判516頁 本体4500円
名古屋大学出版会

一九九八年にアメリカ人類学会が、人種概念の生物学的有効性を否定する声明を出し、そもそも人種というものは生物学的に存在しないと宣言した。それから二〇年以上が過ぎた今日、人種主義はいまだに厳然と存在し、人々の身体や心を傷つけ続けている。特に本書の分析対象となる米国では、黒人に対する理不尽な暴力はとどまるところを知らない。ロナルド・トランプが大統領に就任して人種差別的言説を繰り返し続けたことにコロナ禍が相まってアジアンヘイトが蔓延した。トランプが退任し、コロナ禍が一段落してもその猛威は一向に収まる気配を見せない。

本書は、人種の問題に長年取り組み、ディシプリンを越えて人種に関する研究全体を牽引してきた第一人者による渾身の一冊である。本書が俎上にのせるのは、広告やジョークにみられる人種表象、学会での論争、政府による人種調査や帰化判例、芸術と人種など多岐にわたる。その多様な内容を十分に紹介することは難しいが、評者が関心をもった部分を以下に記したい。

何よりも心惹かれたのが、表5―1と表5―2である。建国直後の一七九〇年から今日まで十年ごとに行われ続けているセンサス（国勢調査）の人種カテゴリーの変遷をすべてのセンサスにあたり著者が自ら作成したものである。これによっていかに人種カテゴリーが確定的なものではなく、揺らぎつつ変化してきたのかが示される。これほどわかりやすくその恣意性をあきらかにしたものを見たことはない。「自由白人」や「自由カラード」といった過去のある時期においては当たり前に存在したが、いつしかセンサスからは消えてしまったカテゴリーが、いつからいつまで存在したのかを示すことで、過去の人々の頭の中を可視化している。「ヒンドゥー」というインドの宗教集団を指す語が、インド人全体を指すカテゴリーとなった過程など、カテゴリー自体の形成過程についての著者の分析と合わせて見ることで、建国当初から今日に至るまでの人種カテゴリーの変遷が一目でわかる。

そして日本人を始めとするアジア人のカテゴリーが、白人と非白人の間で揺れ動く様が時代背景と共に描かれる。日系移民の中には、「自由白人」カテゴリーの曖昧さのために、白人と分類されて、米国籍を取得し、大統領選挙に投票したり、米国のパスポートで海外に渡航したり、第一次世界大戦に従軍した者が存在したのである。日本人は終始「アメリカ人」の枠の外に置かれたわけではなかったのである。

また、センサスの調査のやり方自体の変遷も描かれる。センサスの調査員が調査対象者を見て、この人はこの人種に属すると記入する方式から、調査対象者が自分はどの人種に属すると自分の考えで記入する自己申告制への移行や、近年認められるようになった人種の複数選択などの回答法の変化に対する分析と合わせて読むと、人種カテゴリーの変遷を複合的に見ることができる。

とりわけ巻の後半に登場する様々な人種的背景をもった芸術家たちとの交流とその作品についての章は圧巻である。芸術家に注目する理由を著者は、かれらが「しばしば学問が言語化・概念化する以前に、時代の最先端を切り取って人びとの感性を刺激する作品を世に送り出しているから」であると述べる。すなわち、芸術家を扱うことで、通常の人種研究の範囲をも超越しようとしているのである。本書が扱う芸術家は多岐にわたる。中でも読後に心に残ったのは、先住民居留地の放射能汚染へ問題提起する日本出身の井上菓子や人種間のヘイトに巻き込まれることなく新しいコミュニティを作り上げる努力を続ける韓国出身のジーン・シンである。かれらの作品と語りから、著者は、「いかに人種主義に抗いつつ、希望を捨てることなく未来へとつなげることができるかを」構想する。

本書の口絵に作品が掲載されているロジャー・シモムラが、著者との別れ際にいみじくも付け加えた「アメリカ人一流の企画構成力で報告者を集め、シンポジウム自体が有機的な創作物になる素晴らしいものであったことは周知の通りである。誤解を恐れずに言えば、そのようなシンポジウムに相当することを、実は著者が博覧強記ぶりを発揮すれば一人でも出来てしまうのだということを示しているのが本書ではないだろうか。人種カテゴリーが、人間が創り出した社会的構築物に過ぎないことを様々な角度から示すことで、研究者として著者のやり方で人種主義に対抗する戦いの書であるともいえる。人種主義に心を痛める者たちにこそ必読の一冊である。

（明治大学政治経済学部教授）

イスラーム対ライシテという二項対立図式に依拠したライシテ観を問い直す

宗教の公的な役割を積極的に認め、自由と多元性を重視する「承認のライシテ」を可能にするストラスブールのローカルな特異性と「場所」

和田 萌

佐藤香寿実 著
▶承認のライシテとムスリムの場所づくり
「辺境の街」ストラスブールの実践
2・10刊 A5判404頁 本体5800円
人文書院

それこそが本書のもう一つの主題である、「場所」づくりを通じた承認を可能にする背景でもある。本書は特殊な歴史と制度を持つアルザス＝モゼル地方の一都市において、イスラームを含む多様な宗教が出会い、交渉し、対話する中で形成される「場所」に着目し、その重層性、混淆性を炙り出そうとするのである。

本書の第一部が、フランスにおけるライシテやムスリム、「場所」をめぐる人文地理学の知見に加え、ストラスブールの法制度的特性を記述するのに対し、第二部では、市政と宗教団体が「ムスリムのための場所づくり」を目指して織り成す実践の数々が、丹念なインタビュー調査によって詳らかにされる。それはモスクや公共墓地の建設、宗教間対話の取り組みに行政が積極的に関与していく過程であり、行政や他の宗派から、公認宗派ではないイスラームが自らの「場所」に対する承認を獲得してゆく過程でもある。

本書からは、「ローカル」、「アルザス」、「フランス」、「ヨーロッパ」など多様なスケールを戦略的に用い、よそ者でも時、それはしばしばイスラームの「過剰な」宗教実践を断罪する言説として動員される。近年のフランスで、イスラームの宗教性の表出が問題となる度に「イスラーム対フライシテ」という対立構図が持ち出される状況を考えれば、このようなライシテが多元化する社会の要請に応えうるのかという疑問を持たざるを得ない。

本書は、フランスの「辺境」にストラスブールにおける市政と宗教団体の協調関係に着目し、政治と宗教をめぐるローカルな現場の実践を描き出すことで、イスラーム対ライシテという二項対立図式に依拠したライシテ観を問い直そうとする論考である。そこに立ち現れるのは、宗教の公的な役割を積極的に認め、自由と多元性を重視する「承認のライシテ」の姿である。

先述した宗教シンボル禁止法のように、ライシテに関連した法制度はナショナルなレベルで存在する。ライシテの制度的起源とされる一九〇五年の政教分離法もその一つである。しかし本書の特徴は、法制度に限定されない多様な政治的実践、すなわち法制度としての代表性に疑義が挟まれることも珍しくない。この意味で、誰が参加し、誰が代表するのかについては不断の問い直しが要求され、「ここ」にいるのは誰なのかをめぐる議論は常に開かれている。このように場所を動態的に理解するからこそ、場所づくりを通じて、イスラームが承認され社会に包摂される可能性が生まれるともいえる。

さて、「承認のライシテ」を可能にするストラスブールのローカルな特異性を、ナショナルな実践に繋げていくことは可能だろうか。本書を読めば、「ここ」を越えて別のスケールに移る試みは安易にとられるべき方法ではないことが理解されよう。承認のライシテを可能にする方法は一つではなく、「それぞれの場所の歴史・地理、伝統的文化、人口構成、制度的特徴などに適したライシテの在り方が模索されるべき」とする著者の見解は、「場所」をめぐる意味づけが、ナショナルに限らず、ローカル、グローバルになされることの重要性を示唆している。

（東北大学大学院国際文化研究科助教）

日本軍の軍事医学に関する最先端の歴史研究

闇に埋もれた悲惨な破傷風事件を、七三一部隊をはじめとする日本軍の軍事医学ネットワークにおけるワクチン開発の文脈に位置づけて、広く世に知らしめる

土屋貴志

送られた者たちから出た死者も合わせると、五百人以上が破傷風で死亡している。

日本軍は、インドネシア各地から、およそ三十万人ともいわれる現地住民を、労働力として徴発していた（彼らは現地語でも「ロームシャ」と呼ばれる）。ロームシャたちはジャカルタの収容所に集められ、チフスやコレラや赤痢等の予防接種を受けた後、東インドネシア各地へ送り出されていた。その予防接種液の中に、破傷風の毒素が入っていたのだ。

予防接種液を作ったのは、満州第七三一部隊（関東軍防疫給水部）の姉妹部隊である専門で、三〇年以上にわたり、関係者への聞き取りも含め、この事件を丹念に追ってきた。もう一人の著者である松村は英国経済史家であるとともに七三一部隊研究をリードしてきた。この二人の歴史学者が協働し、闇に埋もれた悲惨な破傷風事件を、七三一部隊をはじめとする日本軍の軍事医学ネットワークにおけるワクチン開発の文脈に位置づけて、広く世に知らしめた。

ところで、本書は、知られざる歴史的事実を白日の下にさらしただけでなく、歴史学的にも非常に重要である。

第一に、生物兵器を使用する際には自国の兵士を感染から守るのを拝聴するという、ありきたりなものではなく、著者一流の企画構成力で報告者を集め、シンポジウム自体が有機的な創作物になる素晴らしいものであったことは周知の通りである。誤解を恐れずに言えば、そのようなシンポジウムに相当することを、実は著者が博覧強記ぶりを発揮すれば一人でも出来てしまうのだということを示しているのが本書ではないだろうか。人種カテゴリーが、人間が創り出した社会的構築物に過ぎないことを様々な角度から示すことで、研究者として著者のやり方で人種主義に対抗する戦いの書であるともいえる。人種主義に心を痛める者たちにこそ必読の一冊である。

（明治大学政治経済学部教授）

師が勾留中に死亡。モホタル教授は一人罪をかぶって「自白」し処刑された。医務班のスレマン・シレガル医師も禁錮刑になり、まもなく獄死した。日本軍は予防接種禍により膨大な数のロームシャたちを苦悶死させただけでなく、それを謀略に仕立て上げ、占領政策に不都合な存在であるインドネシア医学界を崩壊させたのである。

しかし、この事実は、日本はもちろん、インドネシア国内でも、ほとんど知られてこなかった。著者の一人である倉沢はインドネシア現代史が三〇年以上にわたり、関係者への聞き取りも含め、この事件を丹念に追ってきた。もう一人の著者である松村は英国経済史家であるとともに七三一部隊研究をリードしてきた。この二人の歴史学者が協働し、闇に埋もれた悲惨な破傷風事件を、七三一部隊をはじめとする日本軍の軍事医学ネットワークにおけるワクチン開発の文脈に位置づけて、広く世に知らしめた。

ところで、本書は、知られざる歴史的事実を白日の下にさらしただけでなく、歴史学的にも非常に重要である。

第一に、生物兵器を使用する際には自国の兵士を感染から守るのを拝聴するという、ありきたりなものではなく、著者一流の企画構成力で報告者を集め、シンポジウム自体が有機的な創作物になる素晴らしいものであったことは周知の通りである。誤解を恐れずに言えば、そのようなシンポジウムに相当することを、実は著者が博覧強記ぶりを発揮すれば一人でも出来てしまうのだということを示しているのが本書ではないだろうか。人種カテゴリーが、人間が創り出した社会的構築物に過ぎないことを様々な角度から示すことで、研究者として著者のやり方で人種主義に対抗する戦いの書であるともいえる。人種主義に心を痛める者たちにこそ必読の一冊である。

（明治大学政治経済学部教授）

長谷部八朗 編著
「講」研究の可能性
『講』研究の可能性」と題するなどの諸分野から「講」に関心な追究をめざしたものである。「つながり」の諸相を様々な切り

民俗地図のリテ
日本列島上に民俗文化はひとつ共通する民俗文化が存在する。図とは何かを共通理解し、民俗地域性を再発見する。

にいなめ研究会 代表 小島
新嘗の研究
二笠宮崇仁親王殿
三笠宮崇仁親王殿下により昭和いなめ研究会」は誕生した。柳田農耕文化の研究を続けている。ヒナメマツリの歴史」を三笠宮さ

安室 知 著
都市と農の
農の文化資源化を
現代人にとって農はどのような意で国の政治や経済とは別の角度か

松崎憲三先生古稀記念論集
民俗的世界
変容・生成・再編
松崎憲三先生は、このたび古稀を退職された。本書は、長きにわたりと深化に貢献された先生の慶事るために編まれた記念論集である

柴谷宗叔 著
四国遍路
遍路とは？ 100周を超す遍書。その経験と実践から遍路の作えをわかりやすく解説。

香月節子 著〈考古民俗叢書〉
鉄と火と
時代の波と鍛冶職
和鉄から洋鉄へ変わる時代や社職人の軌跡の記録。

岩崎航介 著 朝岡康二 解説
刃物の見
三条の鍛冶屋は顕微鏡を持っていのもと、幅広い内容を詳細に説い

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-48
（価格は税抜き） http://www.bookkown